

入所施設（今は障害者支援施設）で働いていた頃、職員の自主的な活動として、家庭に一時帰宅することができない利用者と水上の先の土樽というところに出かけていました。夏は山歩き、冬は雪遊びの二泊三日でした。

ある年、私はよもぎ峠までを往復するグループを担当しました。参加者は付添いスタッフ(多くは施設職員)を入れて30人ほどで、ガイドブックには婦人・子ども向けと紹介されているコースでした。私は楽観していました。

しかし歩き出すと岩のでこぼこに利用者は難渋し、隊列も長くなりました。本当なら行程の見直しが必要な状況でしたが、逆に目的地に向かおうという気持ちばかりが強くなっていました。「山いつ終わる？」と折り返すところで利用者が言いました。歩き始めて6時間たっていました。下りの道はみるみる暗くなっていき、山道を抜ける前に真っ暗になってしまいました。もう歩くことは危険でした。しかしヘッドランプは必要ないと思って宿に残してきていました。

暗い道を焦りと後悔にさいなまれながら私はひとり急ぎました。すると宿の主人が心配して林道まで来てくれていました。「ヘッドランプを持っていかないと」とその車で宿に、そしてランプを集めてすぐ戻りました。利用者みなさんは暗闇の中でずっと待っていてくれました。ごめん、ありがとうと心の中で繰り返しました。

その夜、谷川岳の山岳救助隊員でもある宿の主人から、ひとつ間違えば遭難事故が起きた。皆さんの山登りは謙虚さがないと厳しく叱られました。その通りでした。その頃の私は仕事では勇んでいました。そういう中でこの「山歩き」に過剰な自己評価がありました。事故にならなかったのは天佑。「一生懸命」の中に潜んでいた慢心。若いころのこの失敗は私の糧になっています。

(平成 29 年 5 月)